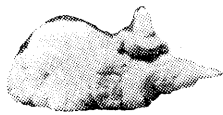


ドーフ粘土



宮崎 洋子

ドーフ粘土を試みるにあたって

ドーフ粘土を試みてみたらと言われたとき、いったい何のことだろう。何かの間違いではないだろうか。ドーフの濁音を除けば、トーフに關係がありそうな滑稽な解釈まで考え出したりしたが、林先生の試作を拝見し、なるほどと納得出来た。

けれども初めての試みであり、予備知識もなしに子どもに与えることに自信が持てず、日頃御指導いただく美術の先生やその他いろいろな先生がたの助言を受け、園の先生がたの御協力を得て、試みることが出来た。

まずドーフということでは頭に浮んだことは、メリケン粉と水がまざり合ったねちねちと手につく軟らかいものであったが、うどんを作るときの要領を見聞きしてこね合せた。

実験の対象とする子どもたちは五才一年保育児で入園したばかりであり、粘土の経験がない。ドーフ粘土を試みる前提として、出来るだけ普通の粘土に親しませる。

その間に最も適量な処方箋を調製するつもりであった。

粘土を作ってみると、まだはつきり処方箋も出来ぬうちに、早く

子どもに与えてみたくなり、不完全なものを与える結果となつてしまつた。

着色は、粉絵具よりも鮮明な食用色粉にし、はじめて与えるのだからと、赤、黄、緑の三色に限定する。

1. ドーフ粘土の処方箋

湯呑一杯のメリケン粉に $\frac{1}{2}$ 匁程度の色粉を水で溶し、まぜると鮮明な赤が出来た。

ほかに二個の固りを作り、一つには、塩をその $\frac{1}{3}$ 程度、まぜ、もう一方には、塩を大匙一杯と油二、三滴加える。(適当な油がなく、まにあわせにミシン油を入れる)

各々ビニールに包み、翌日見ると、何も加えていない固りが一番変化がなかったので、この方法を用いることにした。分量が多くなるにつれて、水の加えかた、こねかたで、出来、不出来があり、なかなか調製出来なかつた。

メリケン粉……二百匁

防腐剤(サルチル酸)……大匙二杯(二十グラム程度)

水……カップ二杯(二合)弱

食用色粉……四匁(普通(市販)粘土約十個の分量)

この程度の処方では、赤が俗に言う牡丹色になる。緑は少し薄く、黄は鮮明。

色を薄くするならば、処方 $\frac{1}{2}$ の色粉を使えばよいと思う。安息酸が求められず、サルチル酸を代用する。

2. ドーフ粘土を与えて

最初の試み次第で興味が持たれたり、活動が偏つたものになるのではないかと思ひ、慎重に準備を進めたつもりであったが、一度めは粉のこねかたで失敗した。

ボールに粉を入れて、適量の水を一度に加え、かきまぜる。こねあげたときは、水も適量と思われれちようど鏡餅のようであった。ビニールに包んでおき、翌朝子どもに与えようと、開いてみると、昨日の鏡餅も流れてべとべと手につくありさま、大あわてで部屋を締めきり、子どもたちに見つからぬようにして練り直す。

しかし一度こねたものはなかなか固くならず、仕方なく手につかぬ程度にメリケン粉をつけて与える。

固さも色もちようど餅のようであり、その上白い粉までついていゝ。「餅のようだ」とかえつておだんご作りを奨励するようにならないうだらうかと苦笑しながら、粘土板と並べて机の上に置いておく。「何だろう」「お餅みたいだ」と見ていた子どもも、横に粘土板が用意してあるのを見て「あの粘土使つてもいい」と尋ねて来る。

ああこれでおだんご作りに終らずによかつたと思ひながらも「これは粘土である」とはじめから、その正体を限定し過ぎたことを残

念に思ったが、いたしかたなかった。

げんそうに見ていた子どもたちも、ひとりが扱いはじめると、「僕も僕も」と争って席に着き、早速おだんご作りが盛んになった。

申し訳にメリケン粉をまぜた位の固さでは変りなく、兎を作り始めても、つまんで作った耳は、手を離せば、もと通りペシャンコになる。舟を作り真中を低くしておくと、せっかくの舟底も浅くなってしまうほどである。それでも一生懸命作っていた。

しばらく丸めたり、叩いたりしていたひとりの子どもが、積木かビニールテープを貼りつけるように板の上に粘土を平らに伸して並べ、キリンを作った。入園一か月目の構成遊びとしては進んだものであり、おだんご的遊びに、やや恐怖を感じていた私も、新しい構成が出てうれしく思った。

二度目からは、固めに固めにとこねるようにしたので一度目のような失敗はなかったが、固すぎると、ぼろぼろこぼれ、くずがたくさん出来る。三色のうち、黄色が一番使われた。緑は木の葉っぱみただと言うものもあったが、木の葉に利用されることもなかった。

赤色を薄く伸し、その中に黄色を丸めて入れあんこの入ったお餅が出来たと喜んでいたが色がまざり合い、使えなくなった。

平面的に三色併合して作るのは、一部の秀れた構成の出来るものだけでほとんどが一色ずつ使う。また三色を欲しがるものがあったも、ただまぜ合せて楽しむ傾向が多く見られた。二色を合せて、違

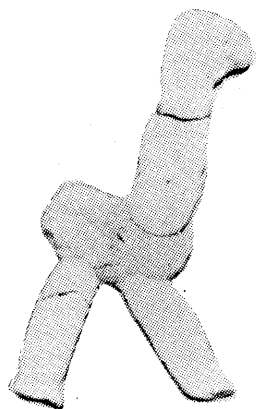
う色が出来たと喜んだり、女兒など、皿を作って、その上に胡麻位の小さな粒に丸めた色とりどりの御馳走を並べる。

フィンガーペインティング、絵画、ちぎり紙などと比べて、その扱いかたで子ども性格、特徴がわかるという傾向は見出せなかった。

まだ実験の回数も少なく、期間も短かく、資料が少ない為かも知れないが……。

3. 補助材料

林先生の実験も参考にさせていただき、園の先生がたとも話し合ったが、今の段階において、子どもたちはまだ補助材料を必要としておらず、一応、用意はしておき、必要に応じて与えることにする。



キリン 首と足……黄色
胴……………緑色
赤い尻尾がとれてしまった

用意の材料、竹ひご、針金、細い竹を割ったもの（割箸）など。遠足の後、動物園で見つけた一つこぶらくだを作っていた子どもが「らくだの首が真直ぐ立たんから、やめた」と落胆したようであったので、用意の竹を持ち出して首の中に通してやる。それを見つけ三、四人が竹を欲しがる。

鬼を作りそれに竹を突き指し、ちょうど、指人形とベープサイドを合せたようなものが出来、面白く発展しそうであったが、動かすと手足が取れてしまい、残念に思った。多くの子どもがおだんこの串に利用していた。

4. ドーフ粘土の活用

ドーフ粘土は普通のもので違い色が豊富に使えるので活用範囲が幅広いのではないだろうか。

活用の長所としては、

○簡単に好む色を与えることが出来る。

絵具、クレパスの使用と同じように、粉絵具（色粉）のませ具合によって、どんな色でも調合することが出来、泥いじりを嫌う神経質な子どもも鮮やかな色に安心して扱う。

しかしひとりだけ（女児）メリケン粉のにおいを嫌い「くさいのが手につくから嫌だ」と、灰色がかった市販の粘土を出してきて使う。

○感触がよい（快感を与える）。

丸めたり押ししたりするだけでも手触りがよい。額にのせてみると、鼻に付けたり、頬を撫でて満足している。

○材料が比較的安価である。

土粘土またはそれに代るものをじゅうぶんに与えられる地域は別として、どこかの園でも市販の粘土に頼っておられるだろう。

高価な粘土では、一人ひとりじゅうぶんな創作が出来るほど、与えることも出来ず、手のひらに載る位の粘土がせいじっばいか、組の共有物としてかわり番こに使っている状態から見ると、粘土の代用として最適である。

前述の処方箋通りの分量では、約百五十円程度、食用色粉は他の材料よりやや高価であるが、粉絵具を使えばもっと安価に出来、じゅうぶん与えることが出来る。

○清潔で無害である。

固さに注意すれば手や衣服を汚すことがない。また防腐剤も無毒なものを使えばよい。

普通粘土と違い、乾燥してくると、ポロポロになり出し、半乾きの粉が、近辺に散り、一仕事ふえることはあるが、子どもたちの創作意欲を充足させ、表現力を養う上においては、惜しむべき仕事ではないと思う。

○弾力性に富む。

うどんを作る

きは、よくこねる

方がよいそうだ。

こねればこねるほ

ど、粉の持つねば

りが出て来る。

ドーフも使えば使

うだけねばりが出

るので、へびを作

るには一番よい。

普通粘土ではせっかく作ったへびも「へびだよ」と他の子ども

をおどかしに行く間に、胴が切れてしまうが、ドーフは、どこまで

も延ばせる。しかし、弾力性に富みすぎて、彫刻的な、こまかい仕

事が出来にくい欠点もある。

○温度による変化が少ない。

保存に気をつければ、夏・冬、固さが違って使いにくいというこ

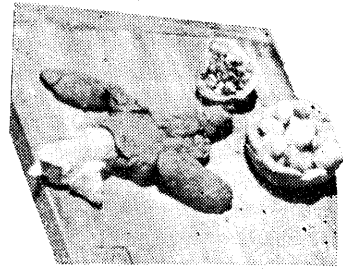
とがない。

短所

○材料が永久的でなく、消耗がほしい。

○乾燥しやすく、したがって使用前後の処置に手がある。

○ドーフの性質上、普通粘土より固く練ることが出来にくい。



子葉とおと亀
頭……………黄
体……………緑

人形を作ったせたら、上の重みで足がペシャンコになってく
やしがり「もう一つの粘土の方がよい」と普通粘土で作るかえる女
児もあった。

はじめはどの子も「色粘土をちょうだい」と、色粘土でなければ
遊べないように喜んで使ったが、この頃では、ぼつぼつ他の粘土を
出してきて使うものが出てきた。

「どちらが好きか」と問えば、皆「色粘土」と答える。

やはり子どもは関心で、色にまざるものはないようだ。

もう少し工夫すれば、ドーフの練り合せかたも簡単に、巧く出来
るだろう。

○弾力性に富むことは、一面欠点でもある。

耳を作っても、つまみかたが足らないとに戻ってしまう。

試みる機会がなかったが、胡粉や色チョークを削って混ぜてみた

らと思っている。

また、子どもたちの構成能力が進めば、今度は、着色せず

え、作品が出来上ってから、指人形と同じ方法で着色してみたら、

面白く発展していくのではないだろうかと話合っている。

失敗ばかり重ねて正しい処方箋も出来ず、実験したとは言えない

が、これを土台にして更に土台を積んでいただき、ドーフ粘土が
創作活動の一分野として、大いに活用されるようになることを望む

ものです。

(八幡市立大蔵幼稚園)